

SAVE HUMANITY

田中康夫 新党日本代表 衆議院議員



新党日本の代表、そして作家でもある田中康夫。

神戸での震災ボランティアや住民投票運動の時代も長野県知事時代も、群れることなく、常に自らの信じる道を歩いてきた。

そんな田中はエネルギー問題で今後どんな行動を取るのか？

Text by Joe Yokomizo Photograph by Makoto Yoshioka

人様に喜んでもらうことがマイ・プレジャーであり、それがボランティアである。それは恋愛と一緒なんです。

——先日、環境省の前で行われた原子力規制委員会の人事に抗議したデモに参加し、96年のベルギーでの「純白の行進」になり白い風船を配ったというのをニュースで見ました。田中さんが抗議の形としてデモへの参加を選んだ理由に興味があります。「デモは暴力的にするものではなく、楽しみながらするものだと思っています。小さな頃から僕は、大きな声で正義を語る人には何か嘘があるんじゃないか、と思ってたんですね。呼び掛け人の1人だった神戸空港建設の是非を問う住民投票運動の時もそう。30万を超える署名が集まっても、リーダーが変わらない限りは空港はできちゃうんですよ。でも、今までは挨拶もしなかった同じジャンクション群の人が、署名のためのテールを出してるとそこに来て、自分の名前を書いて拇印まで押すというのは、人間は捨てたもんじゃないうつていうこと。今回の官邸前に来ている人たちも皆感じていると思うんです。デモをやったからといって原発が直ぐに止まるわけではない。でも、これまで日常の忙しさにかまけて、関心は有っても具体的に声を上げなかったから、まさに矢沢永吉さんが本誌の9月号で見抜いたように『こんな世の中になっちゃった』わけだから」

——僕らが端的に聞きたいのは、まさにその部分です。デモで社会は変わるのか？「そういう質問自体がデモという言葉を変化してるんですよ。神戸の震災の時も、僕が大阪のホテルから50ccのバイクで避難所に通っていると『なんでホテルに泊まってボランティアをやるんだ！』って言う連中が一杯いたわけです。僕の発想は『一人ひとりができることを、できる時にできる所で、できる限りやる』ということ。それが大事なんです。そして、人様に喜んでもらうってなんぼ。人様に喜んでもらうことがマイ・プレジャーであり、それがボランティアである。それは恋愛と一緒なんです。もつと言えば、知恵を出す人もお金を出す人も努力を出す人も、優劣の差はないんですよ。ところが、ボランティアは着たきりスズメの服で寝袋に包まって、避難所の片隅で寝てなきゃいけないって思い込みがある。プラグマティックに考えれば、そのほうが避難所の人々の寝るスペースを奪ってるだろうと。デモも同じことで、デモをしたって何も変わらないっていうけど、そりゃあ一気に変わらんないよ！でもそんなこといったら、なんでみんなツイッターで書いてたりするの？あるいはなんで恋愛をしたって、いろんな雑誌を読んで新しいところへ行こうとするのよ。そこに行っちゃった、ただそれだけで何かが変わるわけじゃないでしょ？だからデモを崇高だとかいう、そういう発想がおかしいんだよね。デモなんて、一つのバカンスと一緒ですよ。楽しみなんです。じゃあ、デモで知り合った人と飲みに行っちゃいけないの？デモで知り合った人とセックスしちゃいけないの？ってことでしょ。そうじゃない。それは『なんとなく、クリスタル』の時から言っている。女の子がボイナスでルイ・ヴィトンを買ってうれしいうって満員電車の中で思う気持ちと、岩波書店の本を一冊読んで利口になったと思うのは同じ、等価であると。だ

けど明らかに行為は違うし、そこで得るものも違う。それはあり方なんです。ところが日本は、政治でも変革の話になると道州制という形の話ばかり。僕から言わせるとクソ食らえ！です。あれは国の形の話です。そうじゃなくて日本は、司馬遼太郎が言ってきたこの国のかたちという形式美の呪縛から離れ、あり方を考えなきゃいけない訳です。なのに形のことばかり言っている。逆にいえば、みんなが唾棄してるはずの役人という世界は絶対に変わらないんです。それは英語にもビュロクラティズム(官僚主義)という言葉があるように、世界中どこもそうなのであって、別に日本人が劣っているわけでも他の国が優れているわけでもないけれども、この国のあり方ってことが全然議論にならないところに大きな問題があると思います」

——では次に僕らに国民がするべきことは？「我々に求められているのは、天動説から地動説への転換です。コペルニクスの展開をしなきゃいけない。天動説の人たち、霞ヶ関も永田町も周りが動いてく、あるいはアメリカの言うことにさえ従ってけばいいと思ってる。その天動説から地動説にしていかないといけないんです。つまり自らが変える。一人ひとりの力は弱いかもしれないけど、だからといって何をやっても同じだって言ったら自分すら暮らせない社会になっちゃいます。湾岸戦争のときに、僕は『この反対声明はユナイテッド・インディヴィジュアルズである』と言ったんです。『ローリング・ストーンズ』が素晴らしいのは単数であるから。日本は常に群れて『ローリング・ストーンズ』、つちゃうわけ。群れていたら音が付いてしまふ。永遠にひとり回転している、だからって協調性がないわけでも人の言うことを聞かないわけでもなく、つねに弁証法のもとで自分を求めて連帯を恐れずやる。それがここにある

YASUO TANAKA

田中康夫○1956年、東京都生まれ。新党日本代表。衆議院議員。大学在学中に書いた『なんとなく、クリスタル』で文藝賞を受賞。95年、阪神・淡路大震災後、神戸でボランティア活動に従事。市営神戸空港建設反対署名運動のリーダーとして活躍。2000年、長野県知事に就任。05年「新党日本」を立ち上げ代表となる。06年8月、長野県知事選挙で53万4229票を獲得するも惜敗。07年7月比例区にて参議院議員に当選。09年8月、兵庫8区(尼崎市)より衆議院議員に当選する。